

研究発表要旨

エウリーピデース『ヒッポリュトス』375-87

——αἰδώςの解釈とスピーチ導入部としての働き

堀川 宏

エウリーピデース『ヒッポリュトス』の375-87は、乳母による嘆願に屈しヒッポリュトスへの恋を明かしたパイドラーが、乳母とコロスによる嘆きを受けて、劇中初めて自身の考えを積極的に語るスピーチの冒頭部分であり、本劇中で最も議論の喧しい箇所の一つである。中でも「人生に破滅をもたらす快樂」の例として385に現れるαἰδώςの意味を巡る議論は錯綜を極めており、それに伴ってこの部分のスピーチ全体における位置付けも安定しない。難しさの原因は、このような快樂の例としてαἰδώςが相応しくない、という認識である。本発表は、このαἰδώςを「性的交わり (sexual activity)」の換喩表現として読む Craik の挑戦的な提案 (cf. *JHS* 113 (1993)) の本質的な妥当性を確認し、その上で375-87を、自身の考え (γνώμη) に従い死ぬという事実を以て不名誉 (δύσκληια) の回避を目論むスピーチ全体の中に、適切に位置付けることを目的とする。

この部分の382-3における快樂 (ἡδονή) と良いこと (τὸ καλόν) との対立的な提示について、発表者にはすでに論考がある (cf. 『フィロロギカ』VI (2011))。本発表ではまず、この対立的提示が文脈中で持つ意味についての考察を出発点に、375-87で一般論として語られる破滅の過程と、391以降で語られるパイドラーの行動とが、考え (γνώμη) が良しとする事への態度という点で対照的であることを確認する。スピーチ全体が正しい考え (γνώμη δικαίαν κάγαθή) に従うことを拠り所とした訴えであること (cf. 426-30) に鑑みて、この対照は、375-87での破滅がパイドラー個人の破滅でないことを意味するだろう。また、そのような破滅の原因として中心的に語られる快樂 (ἡδονή) とその具体例によって、パイドラーに破滅をもたらしつつあり彼女がそれに抵抗している「不義の恋」が表されていないとは考え難い。この見方は、「家の重荷 (ἄχθος οἴκων)」という意味付けによっても強められる。

問題のαἰδώςはこのような文脈に現れる。三項列举の最終項という位置、他の二項との意味的なバランスなどから、このαἰδώςには「不義の恋」を表す働きが期待されるが、問題はαἰδώςをこのような意味に取り得るかである。本発表ではこの語の換喩的な用法その他を検討し、それが不可能でないこと、また換喩という表現形式の特徴から、この文脈でこの語によって「不義の恋」を表す必然性があることを示す。385-7もこの線で読み、最終的に375-87は、「人生はγνώμηの教えに反する不義の恋によって破滅することがあり、恋を選んだなら破滅を避ける手立てはない」という内容を持

つ。続いての問題は、この内容とスピーチ本体との接続の有り様である。鍵になるのが 388-90 で、この行もやはり解釈が安定しない。本発表は 389 の διαφθερεῖν の目的語を 388 の ταῦτ(α) と、390 の τοῦμπαλιν πεσεῖν φρενῶν の内容を「 γνώμη が「良い」と教えることと反対の行動を取る」と理解する。それにより 375-87 は、スピーチ本体への効果的な導入部として読み得る。

「適切な名誉心」と「恥」の意識

——アリストテレス倫理学における無名称の徳の意義——

佐良土 茂樹

アリストテレスの『ニコマコス倫理学』(以下 *EN*) と『エウデモス倫理学』における徳の各論を比較すると、*EN* でのみ論じられる名誉に関わる無名称の徳がある。その内実は名誉への欲求における中庸(便宜的に「適切な名誉心」とする)である(*ENIV,4, 1125b6-8*)。だが、その箇所の論述はごく簡潔で、その徳の意義や役割は明確ではない。

名誉への欲求は、勇気に類似する五種類が論じられるにあたり、「恥」と並列され以下のように語られる(*ENIII, 8*)。「それ(市民的な勇氣)は前に語られた[真の勇氣]にとりわけ似ている。というのも、それは徳のゆえに生じるからだ。すなわち、それは恥のゆえに、また美しいもの(つまり名誉)への欲求や不評の忌避ゆえに[生じる]」(*1116a27-28*)。ここで名誉への欲求や恥はある種の勇敢な行為を生じさせる源泉とされ、その点でその二つは共通の性質を持つ。「恥」は悪評に対するある種の恐れと規定されるが(*ENIV, 9*)、未来志向的にその恐れが生じるとき、人は恥のゆえに戦場での恐怖を耐えることができる。すると、それは将来獲得する名誉を欲することで恐怖に耐えるのとはいわば対照的な情動によって、ある種の勇敢な行為を導く。恥も適切な名誉心もある種の勇敢な行為を喚起しうるが、その種の勇氣は、*EN* では、美しさを目指してなされる真の勇氣とは類似していながらも一線を画す。その区別から、完全な意味での善き人ではない市民たちのある種の勇敢な活動を可能にする「適切な名誉心」の倫理的な意義が浮き彫りになる。つまり『政治学』では「全ての市民が同じ性質の者であることは不可能であるから、市民の徳と善き人の徳が一つということはない」(*1276b40-77a1*)とされ政治的観点からみた有徳なあり方の多様性が論じられるが、その中で市民は「適切な名誉心」によってある種の有徳な行為に与れるのである。

歴史的・政治的文脈から見れば、アテナイ民主政の社会にあって、ペリクレスが戦没者追悼演説の中でポリス繁栄の実現には各人の名誉へのしかるべき欲求は欠くことができずとしてその重要性を説いた(トゥキディデス『戦史』II, 46)。だが *EN* では、

その名誉への欲求は「名誉愛好(φιλοτιμία)」であってはならない。それは多義的に使われる言葉であり、名誉の過剰な追求は非難の対象にもなるからである(1125b14-17)。アリストテレス倫理学において、徳は「善さ」に基づいて言えば頂点であり(1107a7-8)、「名誉追求」に対してもしかるべきあり方が考えられる以上、非難に値する要素を持たない「適切な名誉心」が徳として自らの倫理学のうちに据えられなければならなかった。

以上のように本発表では従来等閑に付されていた「適切な名誉心」について、徳としての役割と意義、及びENの徳の各論内での位置づけを論じる

ミレトス神話とディデュマ

佐藤 昇

歴史家レアンドリオスによれば、ミレトスにあるディデュマイオンには、クレオコスなる人間が埋葬されていたという(BNJ 491-492 F10)。ディデュマイオンとは、ミレトス近郊の神域ディデュマに築かれたアポロンの神殿である。埋葬されているというクレオコスは、半神ミレトスの祖父にあたる。ある伝承によれば、クレオコスの娘と神アポロンの間に生まれた半神ミレトスが、やがてミノス王の手を逃れ、クレタ島を去り、小アジア西岸に新都市を建設したという。このミレトス神話は、ミレトス市の起源譚として古代に広く流布しており、イオニア植民神話と並んで、古代ミレトス人の歴史認識、自己意識を探る上で重要な手がかりとなっている。

先頃、歴史家レアンドリオスに関する詳細な注釈書を公刊したPolitoは、ここで言及されているクレオコスを、クレタ人ではなく、ミレトスのアウトクトンではなかったかと推察している。すなわち、建国者ミレトスがいずれかの伝承の中でアウトクトンとされ、その祖父クレオコスについても、同系統の伝承の中でアウトクトンとされていたのではないかというのだ。ミレトス＝アウトクトン系の伝承が古代に流布していたというのは、Sourvinou-Inwoodが提唱する説である。彼女に従えば、こちらの系統は、ミレトスをクレタ出身と伝える系統に比して、ごくマイナーな異伝に過ぎなかったという。

本報告では、まずPolito説の是非を問い、クレオコス埋葬譚の位置づけを考察する。Politoが根拠に挙げるSourvinou-Inwoodの所説を検討し、また半神ミレトスに関わるその他の神話、さらにイオニア植民神話、その他の系統の建国神話と比較対照することで、クレオコス埋葬譚が些末な異伝ではなく、むしろ古代ミレトス人にとって重要な意味を持つ、半神ミレトスにまつわる中心的な伝承に連なることを示していきたい。

上記の仮説が正しいとすれば、古代ミレトス人たちは、自らの自己認識の核とも言える主流ミレトス神話と関連づけて、自国とディデュマの関係を語っていたということになる。すなわちミレトス人は、神話を通じて、自国とディデュマとの関係を「ミノア時代」に遡る、より由緒あるものとして呈示していたことになる。管見の限り、ディデュマとミレトス・クレオコスとの関係を語る史料は、ヘレニズム初期を遡らない。他方、ヘレニズム期初期以降は、ディデュマの起源をめぐる他の系統の神話も饒舌に語られるようになる。こうした神話伝承、歴史叙述の状況は、当時のミレトス・ディデュマ、そして小アジア西岸のギリシア諸都市が経験した同時代の政治的・文化的状況によって醸成されたのではあるまいか。報告では、当該地域の歴史的状況について分析し、この点についても考察を加えていく。

共和政期ローマの執政官選挙と 優先投票ケントゥリア(*centuria praerogativa*)

内田 康太

共和政期ローマにおいて、ケントゥリア民会は上位公職、とりわけ執政官の選挙という政治的に重要な機能を担っていた。そして、この民会は、抽籤によって選ばれたひとつのケントゥリア(*centuria praerogativa*)が最初に投票を行いその投票結果を他に先立って公表するという特徴的な投票方式を採用していたことが知られている。いくつかの史料において、このケントゥリアの投票結果と当該の執政官選挙の結果に相関性が示唆されることから、これまでの諸研究においては、このケントゥリアの投票結果が後続のケントゥリアの投票結果に大きな影響力を及ぼし得たものと理解され、その理由づけに分析・考察の主眼が置かれてきた。しかしながら、実際に執政官選挙の候補者たちが *centuria praerogativa* の投票を重要視していたことを示す史料言及は非常に少なく、また例外的なものであり、このケントゥリアが概して投票結果に多大な影響力を及ぼしたとする前提には疑問が呈される。

そこで、本報告は、むしろ実際に *centuria praerogativa* の影響力が確認される事例をとりあげ、当該ケントゥリアが投票結果に影響力を及ぼし得る状況を分析することによって、その影響力の内実を明らかにすることを試みる。そのために、本報告では、同時代史料が存在し、かつ比較的記述が詳細で信憑性の高い前 54 年の執政官選挙を中心的な分析の対象とする。前 54 年の執政官選挙では候補者のうち二名が結託して *centuria praerogativa* の投票に対して莫大な額の賄賂を約束していたことから、その投票結果への影響力の大きさが指摘されてきた。とはいえ、ここで看過されてはならないのは、四名の立候補者の当選可能性がほとんど同等であるという特異な状況がその

背後に存在していたことである。すなわち、この事例からは、選挙が接戦になる場合において当該ケントゥリアは影響力を行使し得たと考えられ、このことは *centuria praerogativa* の機能が「票の統一」であったとする従来の理解とも齟齬をきたすものではない。

これに対し、前 64 年の執政官選挙では三名の立候補者のうち少なくとも二名の当選可能性は近接していた点で前 54 年の執政官選挙と類似した状況が想定されるにもかかわらず、結果的には一名が満票当選、二名が僅差の得票を得たことが知られる。後者二名のうち一方が *centuria praerogativa* の票を得ていた点に鑑みれば、本選挙の投票結果は一見すると先の考察に矛盾する。しかしながら、投票終了に至るまで投票者たちは当該公職の最大定数分の票（執政官選挙では二票）を投じたとする、F. Ryan によって提示された投票モデルに基づいて本選挙を分析するならば、*centuria praerogativa* が影響力を及ぼし得なかったのはあくまで上層ケントゥリアに対してであったことを確認することができる。かくして、*centuria praerogativa* は、選挙が接戦となり下層ケントゥリアに投票が及んだ際に限定的に、その投票行動に影響力を及ぼし得たと解することが可能であり、これによって上記の矛盾も整合的に説明づけられるのである。

パトロクロスの葬礼競技と『アイティオピス』

川崎 義和

『アイティオピス』の後半に見られる一連の物語（アキレウスが友アンティロコスの殺害者メムノーンを倒した後パリスとアポローンによって殺され、その死骸をめぐる激しい闘いの後アキレウスの葬儀と競技会が催される）は、『イーリアス』のパトロクロスの出陣から葬礼競技に至るまでのストーリーと平行関係にある。これについては既に F. G. Welcker 1849 によって指摘されたが、その後特に 20 世紀半ば以降『イーリアス』がこの物語（あるいは、『イーリアス』以前に遡る古い同種の物語）から影響を受けたという見方が、H. Pestalozzi 1945、J. T. Kakridis 1949=1944、W. Schadewaldt 1951、W. Kullmann 1960 等のいわゆる「新分析論者」（Neoanalysts）によって精力的に論じられてきた。しかしながら、今日においてもこの学説に対して J. S. Burgess 2001、M. L. West 2003、W. Allan 2005 が反論を展開する一方、B. G. F. Currie 2006 によって支持されており、未だ賛否両論が続いている。本発表では、以下のような従来とは異なる視点からこの問題について再検討を試みることにしたい。

1. 『イーリアス』23.257-897 のパトロクロスの葬礼競技に登場する 22 人の内、死亡者やネストールを除く 18 人の約 4 分の 3（13 人）がクイントス・スミュルナイオス『ポストホメリカ』12.314-32 の木馬の勇士 30 人に含まれ（競技参加者 14 人について

は死亡者を除いてほぼ全員)、しかもこの13人中木馬の建造者エペイオスはパトロクロスの葬礼競技以外には登場せず、その他4人は『イーリアス』で目立った活躍をしないのは何故か。この点についてクイントス・スミュルナイオスの使用した典拠分析等から検討し、パトロクロスの葬礼競技の作者が依拠したと思われる詩(『アイティオピス』?)と木馬の勇士に関する伝承が恐らく元来深く関わっていたことを示唆したい。この競技会の作者が木馬の段を準備することは考え難いからである。

2. アキレウスとパトロクロスの葬礼競技の時間的先後関係について従来の議論を検討し、前者が古いと推論するとともに、既に得られている言語・文体面の分析結果に加えてギリシアの葬礼競技の古い風習や運動競技の発展等の考察を通して、後者の方が比較的后代(『イーリアス』詩人の老年の作か)に属する可能性を指摘する。これらの点を踏まえた上で、パトロクロスの葬礼競技の作者が木馬の物語と結びついたアキレウスの葬礼競技の伝承を利用した可能性を検討する。

以上から仮説的要素を含むが、『イーリアス』の、少なくともパトロクロスの葬礼競技の詩人が、アルクティーンノスの作と伝えられる『アイティオピス』と『イーリウー・ペルシス』(前半で木馬の勇士たちの活躍を描く)を知っていたであろうことを結論し、上述のような類似したストーリーは口誦伝承内部で繰り返し語られた話形が発展したものを見るよりは、むしろ特定の版 versions からの借用(II.23.850-83の弓術の試合はその一例であろうか)として解釈できることを付言しておきたい。

《アレクサンドロス石棺》浮彫の図像解釈に関する考察

——大王の戦闘場面を中心に——

中村 友代

本発表は、初期ヘレニズム時代に制作された《アレクサンドロス石棺》浮彫の図像解釈について、とりわけアレクサンドロス大王の戦闘場面を中心に、図像解釈の再検討を試みるものである。

石棺長辺に配された大王の戦闘場面は、アレクサンドロス大王の姿が認められて以降、実際の戦闘を描いたとする解釈が主流となっている。現在最も有力な説は、紀元前333年のイッソスの戦いと見なす解釈である。イッソスの戦いは、石棺の墓主とされるアブダロニューモスにとって、大王からシドンの王に任命されるきっかけとなる重要な戦いであった。また大王以外に浮彫に登場する人物の解釈に関しては、配下の将軍たちの名前が挙げられている。このようにT. Reinachを始めとする多くの研究者は、浮彫の人物や場面を特定することを試み、本面に限らず浮彫の全面において、文献と浮彫の表現の一致を探し求める考察がなされてきた。

一方 K. Schefold や森谷公俊氏等によって、場面やアレクサンドロス大王以外の登場人物に関して、歴史的な事件や実在の人物と特定することを避ける解釈が提唱されてきたが、未だその議論は不十分と思われる。また近年 C. Houser によって、石棺の装飾をフェニキアのコンテキストの中で再検討する試みもなされている。発表者もまた、これまで考慮されてこなかった以下の点から、浮彫の図像解釈にもフェニキア美術の伝統を踏まえた再検討がなされるべきであり、場面や大王以外の人物の特定をすべきではないと考える。

まず浮彫に登場するアレクサンドロス大王とその敵は、伝統的な戦闘場面を構成するモチーフの一つとして採用されているのではないかと考える。本作には、既に伝統的なギリシアの葬礼美術だけでなく、とりわけ大王に関連する美術とのモチーフ上の類似が数多く指摘されており、制作者がこれらの美術に精通し、モチーフを積極的に援用した姿勢が伺える。英雄的、あるいは神話的モチーフとして普及していた大王の姿もまた、他のモチーフと同じように画面に組み入れられたと考えられよう。

本石棺と共に発見された石棺群が、浮彫に特定の人物や出来事を表していない点も根拠として挙げられる。石棺群が発見されたネクロポリスは、シドン王家によって代々使用されていたとされる。《アレクサンドロス石棺》もまた、王家に好まれた主題の伝統を引き継いでいると考えることは自然であろう。

浮彫にはこれまで特定の場面や人物が表されているとする解釈が一般になされてきたが、こうした背景には顕著な写実表現や、アレクサンドロス大王が登場していること、また大王に関連する文献資料の豊富さ等を理由に挙げることができよう。しかし浮彫の成立には、ギリシアを始めとする、近隣の諸地域の葬礼美術から多大な影響を受け、それらを積極的に取り込み融合してきたフェニキア美術の図像伝統が反映されているのではないだろうか。

真実の生としての自己自身——プロティノスを通しての考察

渡辺 華月

万物の根源としての究極点たる一者を頂点として、万物がそこから出てそこへ帰するものとして世界全体をとらえ返そうとしているのがプロティノス哲学である。その体系は世界像の単なる描写ではなく、自ら自身の向かうべき方向を明確に示すものでもある。

究極点たる一者はおのおのの魂にとってはあくまで自らの内にあり、自らの内面に自らのまなざしを徹底的に集中させることから一者への上昇の道は開かれてくる。最終的

には一個人としての古い自己を棄却し、自ら直接一者と一体化することにおいてこそ、「真実の生」があり、純粹に「自己自身」となることをプロティノスは強調している(『エネアデス』VI8論文、執筆順序は54作品中39番目15章.21-27)。

すべての源であるがゆえに、それ自身は何ものでもなく、生きものともいわれ得ないとされる「一者」との一体化こそが「真実の生」であり、「自己自身」となるというのは、きわめて逆説的な表現に思える。一切の差異を超越した一者との一体化で初めて到達する「真実の生」は、個別者としての各人にとってはむしろ死ではないかとの想念もよぎる。

事実、プロティノス研究者の中には、Beierwaltesをはじめとして、一者との一体化はむしろ自己を失うことであり、一者に次ぐ英知の段階でこそ魂は真に自己自身でありうるとの理解が妥当だとする者も多くいる。そうした論者の多くが典拠とするのが、プロティノス晩年の著作である「生きものとは何か、人間とは何か」(『エネアデス』II論文、執筆順序は54作品中53番目)である。その作品では一者との一体化というモチーフは影をひそめ、身体と交わり、感覚や情念を伴う通常の意味での「生きもの」としての我々に関係づける視点で、魂の本質や生きるということについて考察し、「真のわれわれ」が英知的存在であることが示唆されている。

本稿の目的は、一者と一体化こそ真実の生があるとするVI8で述べられている発想が、単なる逆説でもなければ、IIでの「真のわれわれ」観とも抵触するものでもないことを、様々な異論をも検討しながら、明らかにすることである。そのことは当該箇所同士の整合性の確認に終始するのみならず、あくまでこの世界で生きる限りでのわれわれにとって、一者との一体化ということが、自己実現の根幹に関わる大きな意義を有していることへの理解へと向けるものである。

コノンの像

——古典期アテネにおけるイメージと言説——

周藤 芳幸

本報告は、顕彰行為としての彫像の建立という慣行が古代ギリシアの政治文化の中で果たしていた役割の変遷を明らかにするため、自らの彫像がポリスの公共空間に建立されるといふ栄に浴した最初期の例の一つであるコノンのケースについて検討し、その歴史的背景を明らかにしようとするものである。人物の肖像彫刻(具体的には青銅像)は、後代のパウサニアスの叙述などからも窺われるように、ある人物をめぐる歴史的な事件などの公的記憶が「歴史」として言説化されるにあたり、エージェンシーとして大きな役割を果たしていた。そのために、前4世紀には、イソクラテスのように青銅像に対する弁論の優越を説く者が現れる一方で、とりわけその後半には青銅

像の建立がポリスによる顕彰行為の重要な要素となり、ヘレニズム時代へと受け継がれていったのである。

しかし、アテネにおける私人の肖像彫刻の伝統が、前5世紀に大きな断絶を経験したことも、よく知られている通りである。デモステネスは、コノンがハルモディオスとアリストゲイトン以来、初めて青銅像の建立によって市民団から特別な敬意を表されたと述べているが、この証言を信じるならば、アテネでは民主政が確立されてからおよそ一世紀にわたって、人物肖像の公的建立在が忌避され続けていたことになる。また、それがほぼ同時期における葬制の変化（墓碑彫刻の欠如）とも対応していることは、見逃されてはならないであろう。

この間の事情をめぐって、かつて報告者は前5世紀の「空白期」にも、散発的ながら私人の肖像彫刻がポリスの公共空間に建立されていたことを示唆したが、そうであればなおのこと、なぜ前4世紀にデモステネスが上述のような言説を残したのかが問われなくてはならない。また、後にネポスは、マラトンの功績者ミルティアデスには僅かな目に見える榮譽しか与えなかったアテネ市民団が、ファレロンのデメトリオスのためには三百もの彫像を立てることを決議したと、皮肉をこめて言及しているが、それは、このような顕彰行為としての彫像建立をめぐる心性の変化が、後世の人々の目にも奇異に映ったことを示している。それでは、このような変化は、いったい何を契機として生じたのであり、そこでコノンの彫像の建立という事件が果たした役割は、いかなるものだったのだろうか。

コノンの像は、アテネばかりではなくイオニア諸都市にも建立されていたが、マグネシアのアゴラにテミストクレスの像があったと伝えられることも考え合わせるならば、彫像建立慣行をめぐるこのような変化の原因がアテネ内部にのみ求められる性質のものではないことは明らかである。そこで、本報告では、コノンの青銅像がアゴラに建立されるに至った経緯を幅広い視野のもとで再検討することにより、前4世紀のギリシア世界における彫像文化の一端に光をあてていきたい。

三つの関係軸の交差点：『オデュッセイア』第22歌 465-477行

西村 賀子

オデュッセウスと息子のテレマコス求婚者たちを殺害した後、中庭で12人の女中たちを一斉に絞殺し、山羊飼いのメランティオスの四肢や生殖器などを切断した（*Od.* 22.465-477）。

この処刑をどう考えればよいのだろうか。求婚者殺害については、その道義的正当性が随所で語られるため、物語展開における必然性は明らかである。だが女中たちと

山羊飼いの惨殺は、求婚者たちの場合ほどには明瞭に倫理的根拠が語られないため、プロットの観点からは、求婚者殺害に続く付随的要素のように見える。実際、求婚者の誅殺はしばしば議論的となるが、不忠な召使いたちの処罰は先行研究でもあまり論じられていない。議論の対象になる場合でも、女中たちの絞殺方法が実際に可能であるかどうか、山羊飼いの身体の切断が致命的なものであるかどうかという物理的観点から、あるいはこの処刑が適切であるかどうかという倫理的観点から論じられてきた。

本報告の目的は、従来あまり注目されなかったこの個所が詩篇後半のなかでどのような意味を持つかを明らかにすることである。分析の対象は、女中たちと山羊飼いの処刑までの登場人物たちの発言やさまざまな場面である。考察は次の三つの関係軸に沿って進められる。すなわち (1) 主従関係の軸、(2) 社会的性差の軸、(3) 世代の軸である。

まず主人と召使いの主従関係の軸に関しては、処刑された女中の一人メラントと山羊飼いのメランティオスがダブレットであることや、不実な召使いと忠実な召使いが詩篇後半で対比的に描写されていることに注目する。次に、男性と女性という社会的性差の軸ではメラントを中心として、彼女とペネロペおよび求婚者の一人エウリュモスの関係を考慮に入れ、貞節の観点から検討する。そして、父親と息子という世代の軸については、オデュッセウスではなくテレマコスが主張する方法によって女中たちの処刑が執行された (*Od.* 22.440-445) ことから、求婚者たちや不実な召使いたちが乞食姿の主人公に侮辱を加える場面でのオデュッセウスとテレマコスの対応と発言を精査し、父と子の関係の推移を検討する。

以上三つの関係軸はイタカの社会的秩序の再構築の成就に不可欠な要素として、詩篇後半で複雑に絡み合いながら通底している。これらの関係軸は第 22 歌 465-477 行で交差するとともに、そのうちの一つである主従関係の軸が収束する。その結果、物語の焦点は社会的性差と世代という他の二つの軸に移ることになり、それによって、詩篇終盤の夫と妻の再会 (第 23 歌)、および父子の再会と三世代の協働 (第 24 歌) の効果が高まる。

聴衆 (読者) に強い印象を与える召使いたちの刑罰が多くの伏線に支えられながら、物語展開の必然的な要素を構成していること、そして『オデュッセイア』の全体構想における接合部分として有機的な機能を果たしていることを、以上の考察から明らかにしたい。